

「狭義敬語」の分類

蒲谷 宏・川口義一・坂本恵

【キーワード】 待遇表現・待遇語・待遇言材・狭義敬語・狭義敬語言材

はじめに

本稿は、現代共通日本語における「狭義敬語」の性質を明らかにすることによって、今後の待遇表現研究の基盤を作ることを目的とするものである。

考察の結果として、「狭義敬語」はその敬語的な性質の違いに基づき分類されることになるが、狭義敬語を分類すること自体が本稿の主眼となるものではない。筆者らの最終的な目的は「待遇表現」を総合的に解明していくことにあり、狭義敬語の分類はそのための基礎研究の一部を為すものと考えている。

またこの分類は、先行諸研究からの恩恵を受けてはいるが、あくまでも独自の考察の枠組みに基づいてなされたものである。したがって、先行諸研究に対する部分的批判や部分的修正を意図するものではない。

1 考察の枠組み

まず、考察のための基本的な枠組みについて述べておきたい。

1-1 待遇表現

「待遇表現」とは、基本的に次のような一連の「表現主体の表現行為」であると規定する¹⁾。

ある「表現主体」が、ある「表現意図」を持つ→「自分」・「相手」・「話題の人物」相互の「人間関係」および「表現の場」（「状況」・「文脈」）を認識する²⁾→「表現形態」（「音声表現形態」あるいは「文字表現形態」）を考慮する→以上の制約に応じた「題材」・「内容」を決定し、適当な「言材」を選択して「文話」³⁾（「文章・談話」）を構成し、「媒材化」（「音声化」あるいは「文字化」）する。

1-2 待遇言材

「言材」というのは、く「言語主体」において成立した、「音概念」（あるいは「文字概念」）と「概念」（あるいは「表象」）とをつなぐ「回路」>だと規定することができる。より平明に記述すれば、「言材」とは、具体的な表現とは切り離して抽象的に捉えることのできる「コトバ」とであると言える。

例えば、「あなたはこの本をお読みにになりましたか。」という「文話」は、「アナタ」「ハ」「コノ」「ホン」「ヲ」「オーニナル」「ヨム」「マス」「タ」「カ」という「言材」によって構成されているということになる⁴⁾。（以下、「言材」についてはカタカナ表記で示す）

これらの「言材」の中、「表現主体」が「人間関係の上・下」や「場の改まり・くだけ」など」を認識した結果選択したもの、逆に言えば、その概念の中に「人間関係の上・下」や「場の改まり・くだけ」など」に関する情報が含まれている「言材」のことを「待遇言材」と規定しておく。上の例では、「アナタ」「オ～ニナル」「マス」が「待遇言材」ということになる。

1-3 待遇語

「言材」が具体的な「文話」において用いられた状態を「語」と規定し、抽象的な存在としての段階にある「言材」とは区別して考えることにする。

同様に「待遇言材」が具体的な「文話」において用いられた状態を「待遇語」と規定し、「待遇言材」とは区別して考えることにする。この区別は本稿において重要なものとなる。

前述の「あなたはこの本をお読みにになりましたか。」の例で言うと、「あなた」「およみになりー」「ましー」などが「待遇語」ということになる。（以下、「（待遇）語」についてはひらがな表記で示す。なお、「ー」は「言材」と「語」との形態が異なるものに付す）

「待遇言材」が「文話」を離れてそれ自体抽象的な存在として捉えられるものであるのに対し、「待遇語」は、あくまでも具体的な「文話」の中で機能するものである。したがって、例えば上記の「およみになりー」という待遇語について言えば、その動作主体は抽象的な動作主体ではなく「あなた」という語によって表される人物（すなわち表現主体が「相手」として認識する人物）であり、表現主体はその「相手」を上位者として待遇しているといった「人間関係」に関する情報も付与されているということになるわけである。

1-4 「待遇言材」としての「狭義敬語」と「待遇語」としての「狭義敬語」

「待遇表現」を解明していくためには、「表現主体の具体的表現行為」そのものに視点をおく必要がある。しかし、そうした「表現レベル」での研究とともに、その基礎研究として、「待遇言材」、「待遇語」に視点をおいた考察も重要なものとなる。

本稿では、そうした「待遇言材レベル」、「待遇語レベル」での研究の第一段階として、「おっしゃる」「いたす」「さしあげる」など、「狭義の敬語」と考えられるものを考察の対象とすることにしたわけである。ただし、「狭義敬語」の性質を考察し、その性質によって「狭義敬語」を分類しようとするとき、次のような問題が生じる。

例えば「おてがみ」という「狭義敬語」を取り上げて分類しようすると、①「あなたのお手紙」であれば、いわゆる「尊敬語」、②「わたしから（あなたへ）のお手紙」であればいわゆる「謙譲語」、③「最近の若い人たちはお手紙を書きませんわね」の場合には「美化語」ということになり、「おてがみ」自体の持つ敬語的性質は明らかにならない。これを「おX」という形にして考えても、「おX」自体ではいわゆる「尊敬語」にも「謙譲語」にも「美化語」

にも分類できず、その用法によって所属が決定されるということになる。それならば、敬語はすべて用法によって分類されるのかということではなく、例えば「おっしゃる」という「狭義敬語」は、用法によらずともそれ自体でいわゆる「尊敬語」と決定できる性質を持っているようであり、むしろ実際の用法を考えることによって（例えば上司が部下に対しても「おっしゃることはわかります」と言うような場合や、母親が子供に「早くおっしゃい」などと言う場合）、かえって「尊敬語」であるとは決めにくなってしまうのである。要するに、「おてがみ」については、用法に基づいて敬語としての性格を決定し、一方「おっしゃる」については、その語の持つ本来の敬語的な性質に基づいて分類するという、「分類基準のゆれ」ともいえるべき問題が生じてしまうということである。

こうした問題を解決し、敬語分類に一貫性を持たせるために、本稿においては、「狭義敬語」を「言材レベル」と「語レベル」とに分けて考える、すなわち「待遇言材」としての「狭義敬語」と「待遇語」としての「狭義敬語」とに分けて考察するという枠組みを用いることにしたわけである。

上にあげた例を用いると、「おてがみ」という「狭義敬語」は、「オ～」という「待遇言材」と「テガミ」という「言材」から成立っており、それが例えば「お手紙を拝見しました」という「文話（の一部）」においては「おてがみ」という「待遇語」として機能しているというように考え、また「おっしゃる」という「狭義敬語」は、「オッシャル」という「待遇言材」が、例えば「何かおっしゃいましたか」という「文話（の一部）」においては、「おっしゃいー」という「待遇語」として機能しているというように考えるわけである。

具体的な整理のし方や分類のための術語などについては第2章以下において詳述するが、このように、「オ～」という「待遇言材」の性質と、「おてがみ」という「待遇語」の性質を分け、また「オッシャル」という「待遇言材」の性質と、「おっしゃいー」という「待遇語」の性質を分けて整理することによって、「狭義敬語」の持つ二面性を明確にすることができると思われるのである。

2 「待遇言材」としての「狭義敬語」

まず、「待遇言材」としての「狭義敬語」（以下、「狭義敬語言材」とする）について考察していく。

「狭義敬語言材」は、例えば、「オッシャル」「モウシアゲル」「クダサル」「イタダク」「イタス」「オ～ニナル」「オ～スル」「オ～クダサル」「ゴ～イタス」「レイ（令）～」「～レル」「～サマ」「キ（貴）～」「オ～」「ゴ～」「デス」「マス」「デゴザイマス」などが代表的なものとして挙げられるであろう。これらの「狭義敬語言材」の持つ性質はそれぞれどのようなものであり、その性質の違いによってどのように分類することができるのか、ということを書いていきたい。

a. まず、「オッシャル」について考えてみると、「オッシャル」という「狭義敬語言材」は、「言う」という「概念」に、その「言う」動作を行う主体が「高い」者として待遇されているという、いわば「敬語的概念」が加わったものと規定することが出来る。つまり、「オッシャル」＝「言う（概念）」＋「その動作主体が高い（敬語的概念）」という形で、その「狭義敬語言材」としての性質を示すことができるわけである。

ここで留意しておくべき点は、「狭義敬語言材」としての記述に「待遇語」や「待遇表現」としての観点からの記述を持ち込んではないということである。それは例えば「オッシャル」という「狭義敬語言材」の性質として、く「話題の人物」あるいは「相手」を高く待遇する」といった記述やく「自分」や「ウチの者」の動作には用いられない」といった記述をしないということである。「オッシャル」という「狭義敬語言材」の持つ「敬語的概念」は、あくまでも「その動作主体が高い」ということである。待遇表現においては、「相手」あるいは「話題の人物」を高く待遇しようという認識に基づいて表現しようとしたとき、その認識にふさわしい性質を持つ「狭義敬語言材」として、「動作主体が高い」ことを表す「オッシャル」が選択されるということであって、「オッシャル」自体の性質に「相手」や「話題の人物」を高めるということが含まれているのではないのである⁵⁾。そのように考えることによって、「おまえがおっしゃる」や「おれがおっしゃる」という文が、「表現レベル」での動作主体に対する認識と「オッシャル」が「言材レベル」で持つ性質のずれを利用した冗談や皮肉として成立するものであることの説明もしやすくなるのだといえよう。

「オッシャル」と同様、「動作（あるいは状態）の主体が高い」という「敬語的概念」を持つ「狭義敬語言材」としては、他に「イラッシャル」「ナサル」「メシアガル」などがある。この類の「狭義敬語言材」を、「直接尊重言材」という術語で呼ぶことにする。

b. 次に「モウシアゲル」であるが、「言う」という概念にくその動作に関係するあるいはその動作が及ぶ人物が高い」という「敬語的概念」が加わったものであるといえる。つまり、「モウシアゲル」という「狭義敬語言材」の性質は、「言う（概念）」＋「その動作に関係する人物が高い（敬語的概念）」という形で示すことができるわけである。

このような性質を持つ「狭義敬語言材」は他に、「ウカガウ」「ソンジアゲル」「ハイケンスル」などがあげられる。この類は、「間接尊重言材」⁶⁾とする。

c. 「クダサル」は、「くれる（概念）」＋「その動作主体が高い（敬語的概念）」という点では「a. 直接尊重言材」と同類なのだが、aにはない「恩恵の授受」という要素（これも敬語的概念と考えられる）が加わっている。

このような性質を持つ「狭義敬語言材」を「恩恵直接尊重言材」という術語

で呼び、一類とする⁷⁾。なお、「テクダサル」も同様の敬語的性質を持っていると考えられるため、同類とする。

d. 「イタダク」は、「もらう(概念)」+「その動作が関係する人物が高い(敬語的概念)」という点では「b. 間接尊重言材」と同類なのだが、bにはない「恩恵の授受」という要素が加わっている。このような性質を持つ「狭義敬語言材」としては他に「サシアゲル」がある。これらを「恩恵間接尊重言材」とする。なお、「テイタダク」「テサシアゲル」も同様の敬語的性質を持っていると考えられるため、同類とする。

e. 次は「イタス」についてだが、「イタス」は、「する」という「概念」に、〈動作主体を高めない〉という「敬語的概念」が加わっている。「わたくしがそれをいたします」「先輩がそれをいたします」「鳥の声がいたしますね」などの例から、その敬語的性質を抽象していくと、「イタス」は「動作主体を低める」というのではなく、むしろ「高めない」という性質を持っていると考えられる。これに加え「イタス」には敬語的な性質として、より重要な性質がある。それは「かたい、改まった」といった性質である。ただし、これは「イタス」の持つ「概念」に関わる情報というよりも、「イタス」という「狭義敬語言材」全体の持つ情報、いわば「言材情報」とでもいうべきもののように思われる。要するに、「イタス」という「狭義敬語言材」は、「する(概念)」+「動作主体を高めない(敬語的概念)」+「かたい、改まっている(言材情報)」という性質を持っているということになる。同様な性質を持つ「狭義敬語言材」としては、「オル」「ゴザル」「マイル」「モウス」などがあげられる。この類を「丁重言材」とする⁸⁾。なお、「テオル」「テゴザル」「テマイル」なども敬語的性質は同様のものとなる。

f. 次は「オ～ニナル」であるが、これは上に述べてきた「狭義敬語言材」とは異なり、それ自体で「概念」+「敬語的概念」という性質を持つものではなく、「～」の部分に入る「言材」の持つ概念に敬語的概念を付け加えるという性質を持つものである。したがって、「オ～ニナル」は、〈「～」部分の動作主体を高める〉という敬語的概念だけを持つ「狭義敬語言材」ということができる。ただしこの言材は概念を持たないという点で、eまでに説明してきた言材とは異なる性質を持っているため、これを「狭義敬語形式言材」と名付けることにする。このような性質を持つものは他に、「オ～ナサル」などがある。

「ゴ～ニナル」「ゴ～ナサル」は、後述するように「オ」と「ゴ」の持つ性質の違いはあるが、敬語的概念としてはほぼ同様の性質を持つ「狭義敬語形式言材」とみなすことができる。両者を併せて「直接尊重形式言材」とする⁹⁾。

g. 「オ～スル」は、〈「～」部分の動作に関係する人物を高くする〉という敬語的概念を持つ「狭義敬語形式言材」ということになる。同様の性質を持つ

ものとして「オ～モウシアゲル」がある。他に「ゴ～スル」「ゴ～モウシアゲル」なども、「オ」と「ゴ」の持つ性質の違いはあるが、敬語的概念としてはほぼ同様のものといえよう。この類を「間接尊重形式言材」とする¹⁰⁾。

h. 次に「オ～クダサル」「ゴ～クダサル」であるが、これは、く「～」の動作主体を高くする＋恩恵の授受という敬語的概念を持つ「狭義敬語形式言材」となる。

また、「オ～イタダク」「ゴ～イタダク」も、く「～」の動作主体を高くする＋恩恵の授受という敬語的性質を持つため同類となる。この類を「恩恵直接尊重形式言材」とする。

このような「言材レベル」からの分類の特色となるのは、「クダサル」と「イタダク」は、それぞれ「恩恵直接尊重言材」、「恩恵間接尊重言材」というように別類であるが、「オ・ゴ～クダサル」と「オ・ゴ～イタダク」はいずれも「恩恵直接尊重形式言材」になるという点である。

i. 次は「オ～イタス」「ゴ～イタス」であるが、これは「オ・ゴ～スル」と「イタス」の性質を併せ持つものである。つまり、く「～」の動作に関係する人物を高くするという性質と、く「～」の動作主体を高めない＋「かたい、改まっている」という性質とを持っている「狭義敬語形式言材」ということになる。この類を「間接尊重形式丁寧言材」とする。

j. 「レイ（令）～」については、く「～」の人物を高くするという性質を持った「狭義敬語言材」ということができる。同様の性質を持つものとして他に「ハウ（芳）～」などがあるが、この類を「直接尊重接頭言材」とする。

k. 次は「～（ラ）レル」であるが、これはく「～」の動作・状態の主体を高くするという性質を持った「狭義敬語言材」といえよう。

「～サマ」は、く「～」の人物を高くするという性質を持った「狭義敬語言材」といえる。他に「～ドノ」「～シ（氏）」などが同じ性質を持つものである。敬語的な性質としては「～（ラ）レル」と共通するため、これらを一括して「直接尊重接尾言材」としておくことにする。

l. 次に「キ（貴）～」であるが、これはく「～」に関わる「相手」を高くするという性質を持った「狭義敬語言材」であると考えられる。他に「オン（御）～」「（ギョク玉）～」などがある。

これとは逆に「グ（愚）～」「ヘイ（弊）～」などは「～」に関わる「自分」を低くするという性質を持った「狭義敬語言材」とであるといえる。

その他の「狭義敬語言材」が「語レベル」になるまで「具体的な人間関係の特定」に関する情報を含まないのに対して、これらの「狭義敬語言材」は、現代共通日本語においては、「言材レベル」で「相手」専用、「自分」専用とい

った敬語的性質を持つものであるといえるため、それぞれを「相手尊重接頭言材」、「自己卑下接頭言材」とし、両者併せて「尊卑接頭言材」とする¹¹⁾。

m. 次に「オ～」「ゴ～」について検討する。

まず「オ～」であるが、「オ～」という「狭義敬語言材」の持つ性質は、「～」を「きれいにする」というように規定することができる。例えば「お手紙」の場合であれば、「オ～」という「狭義敬語言材」は「テガミ」という「言材」を「きれいにする」という性質を持っているということである。これは極めて抽象的、あるいは曖昧な規定であるとみえるかもしれない。しかし先にも触れたように、言材レベルの持つ敬語的性質は、本来抽象的なものであり、そのために汎用性の高いものとなると考えたほうがむしろ待遇表現の正確な考察につながるのではないと思われる。「オ～」という「狭義敬語言材」が、「きれいにする」という極めて一般的な敬語的性質を持っているからこそ、「あなたの手紙」はもちろんのこと、「あなたに届くわたしの手紙」にも、「若者一般の手紙」について表現するときにも選択することができ、また「きれいになった待遇語」を用いた「きれいな表現」をすることによって、結果としていわゆる「品格保持」にもつながっていくということなのではないだろうか。このような「きれいさ」が「丁寧さ」とどう絡むかというあたりの考察は今後の課題とするが、「オ～」についても「言材」レベルでの記述と「語」レベル（具体的文脈で用いられる「オ～」+他の「言材」）での記述を分けることによって、その敬語的性質が明らかになると考えられるのである。

同様に「ゴ～」について考えてみると、「ゴ～」の持つ敬語的性質は「りっぱにする」ということなのではないだろうか。これも曖昧なものではあるが、こうすることによって「オ～」の持つ性質との違いを示すことができると思われる。

「オ～」「ゴ～」は、厳密にはやや異なった性質をもつ「狭義敬語言材」といえようが、共通点は多いため、一括して「美化接頭言材」という術語で呼ぶことにする。

n. 次に「デス」「マス」であるが、これらも敬語的概念のみを持つものである。しかし、「デス」「マス」は直前に来る「言材」の概念に何かを加えるというのではなく、その有無は「文話」全体の丁寧度に関わるものである。つまり「デス」「マス」は、〈文話を丁寧にする〉という敬語的概念を持つ「狭義敬語言材」と考えられるのである。そこでこれを「丁寧文体言材」とする。

o. 「デゴザイマス」も同様に「文話」全体に関わるもので、〈文話を丁寧にする〉という敬語的概念を持つものと考えられる。「デアリマス」と併せ、これらを「丁寧文体言材」とする。

以上、「狭義敬語」について「言材レベル」の性質の記述から分類の可能性

を見てきたわけだが、これらを整理し、一覧すると表1のようになる。

3 「待遇語」としての「狭義敬語」

次に、「待遇語」としての「狭義敬語」（以下、「狭義敬語」とする）について考えていくことにする。

「狭義敬語」は先にも述べたように、「狭義敬語言材」が「文話」の中で機能している姿ということができる。したがって、「狭義敬語」は、「狭義敬語言材」としての性質を残しつつ、「文話」における役割を果たす、という二重の性質を持つことになる。しかしここでの記述は、「文話」における機能の面についてではなく（それはむしろ「待遇表現」としての記述に近くなると思われるため本稿の直接の課題ではない）、あくまでも「狭義敬語」自体の敬語的性質がどのようなものであるのかという点に絞られる。そしてその上で、それが「狭義敬語言材」とどのような関係にあるのかを明らかにすることが、本稿の重要な課題となるといえよう。

a. まず、「オッシャル」「イラッシャル」などの「A1・1直接尊重言材」が、「文話」において機能したものを「直接尊重語」という術語で呼ぶことにする。「直接尊重語」は、〈その語の持つ概念に含まれる「動作・状態・所有の主体、あるいは人物」が高い〉という敬語的性質を持つものである。「狭義敬語言材」が「直接尊重語」として機能しているものとしては他に、①例えば「おかきになる」など「B1・1直接尊重形式言材」の「～」部分に他の「言材」が加わったもの（以下、＋「言材」という形で示す）、②「B3・1直接尊重接頭言材」＋「言材」（例えば「れいふじん」など）、③「B3・2直接尊重接尾言材」＋「言材」（例えば「かかれる」「やまださま」など）等がある。

b. 次に「A1・2間接尊重言材」が、「文話」において機能したものを「間接尊重語」と名づける。「間接尊重語」は、〈動作（あるいは動作結果）に関係する人物が高い〉という敬語的性質を持つものである。「狭義敬語言材」が「間接尊重語」として機能しているものとしては他に、「B1・2間接尊重形式言材」＋「言材」（例えば「おききする」など）がある。

c. 「恩恵尊重」系の「言材」が、「文話」において機能したものを「恩恵尊重語」とする。〈「A1・3・1恩恵直接尊重言材」、「B1・3恩恵直接尊重形式言材」の中「いただく」系を除いたもの＋「言材」〉は、「恩恵直接尊重語」（例えば「くださる」「おかきくださる」など）として機能し、〈「A1・3・2恩恵間接尊重言材」、「B1・3恩恵直接尊重形式言材」の中「いただく」系のもの＋「言材」（例えば「おかきいただく」など）〉は「恩恵間接尊重語」として機能しているということになる。

「恩恵尊重」系の語の分類結果は一見複雑なものにみえるかもしれないが、

「狭義敬語言材」（「待遇言材」）と「狭義敬語」（「待遇語」）とを分けることによって、言語事実を反映した形で記述されているにすぎない。

これは例えば、「オ〜クダサル」＋「カク（書く）」・「オ〜イタダク」＋「カク（書く）」という言材レベルでみると、「オ〜クダサル」も「オ〜イタダク」も、ともに「カク」という言材の概念「書く」という動作をする主体を高くする「直接尊重」という敬語的な性質を持っているという点で同類となるが、それが「おかきくださる」「おかきいただく」という「待遇語」レベルになると、高められる人物は同じであっても、「おかきくださる」は「直接尊重」、「おかきいただく」は「間接尊重」の性質を持っているという点でこれを同類とみなすことができなくなる、ということを示しているわけである。

このようにすることによって、「くださる系」と「いただく系」の類似部分と異同部分が、その言語事実即ち整理できるのではないかと考えている。

また、「恩恵尊重言材」（特に「恩恵尊重形式言材」）の段階では、「恩恵の授受」という性質を持っているだけで、恩恵の与え手・受け手についての具体的な情報は付与していないのだが、「恩恵尊重語」の段階では、「自分（あるいは自分側の人物）」を中心とした恩恵の授受の方向性が情報として加わってくると考えられる。

d. 「A 2 丁重言材」が、「文話」において機能したものを、「丁重語」と名づける。（補助動詞系、例えば「かいてまいり（ます）」なども含む。）

e. 「B 2 尊重形式丁重言材」が、＋「言材」によって「文話」において機能したものを、「尊重丁重語」とする。（例えば「おかきいたし（ます）」など）

f. 「B 3・3 尊卑接頭言材」が、＋「言材」によって「文話」において機能したものを、「尊卑語」とする。「尊卑語」には、「御社」「貴校」「玉稿」などの「相手尊重語」と「弊社」「小生」「愚息」などの「自己卑下語」とがある。

g. 「B 3・4 美化接頭言材」は、＋「言材」によって「文話」において機能すると、あるものは「直接尊重語」に、あるものは「間接尊重語」に分類される。そのどちらにも分類できない「待遇語」を「美化語」と名づける。先の例で言うと、「狭義敬語」としての「おてがみ」は、具体的な「文話」において、「直接尊重語」、「間接尊重語」、「美化語」として機能しようということになるわけである¹²⁾。

h. 「C 1 丁寧文体言材」が「文話」において機能したものを、「丁寧文体語」と名づけ、「C 2 丁重文体言材」が「文話」において機能したものを「丁重文体語」とする。両者を併せて「文体語」とする。「文体語」は敬語的概念のみを持つ点、「文話」全体に関わるという点において、他の「狭義敬語」とは異

なる性質を持つものである。

以上述べてきた「待遇語レベル」の分類を整理し、一覧すると表2のようになる。

おわりに

「狭義敬語」の性質を明らかにするために、「待遇言材」としての「狭義敬語」と「待遇語」としての「狭義敬語」とを分けて整理し、その結果それぞれにおける「狭義敬語」の分類を試みた。

はじめにも述べたように、分類自体は最終目標ではなく、今後の「待遇表現研究」の出発点ともなるべきものである。「狭義敬語」の分類に関して分析の道具とした「待遇言材」と「待遇語」の枠組みが「待遇表現」全般の分析にとっても有効なものかどうか、実態調査も含めて、今後も検証を続けていきたいと考えている。

注 1) 待遇表現の規定に関して詳しくは、蒲谷宏・川口義一・坂本恵「待遇表現研究の構想」（『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』6、1994）を参照されたい。

注 2) 基本的に、「人間関係」については「上・下の軸」、「場」については「改まり・くだけの軸」によって待遇表現のあり方が決まってくると考えている。

注 3) 「文話」は、文字表現としての「文章」と音声表現の「談話」とを総称した術語として用いる。なお、「文話」は「表現主体の表現行為の結果としての表現」の基本的統一体と捉え、「表現主体の行為としての表現」とは区別して用いることにする。

注 4) 「言材」は単なる「語句のリスト」ではなく、体系的なものとして考えている。なお、「言材」については、蒲谷宏「言語と言材」（『国語学研究と資料』16、1992）を参照。

注 5) 「言材レベル」と「表現レベル」におけるこの相違は、語それ自体の意味と語の文法的機能との関係についても言い得るものであろう。そうした点についての詳しい検討は別に譲るが、このように、語が「表現の資材」として持つレベルの情報と「表現」上のレベルで表される情報とを区別して扱うことによって、より重層的な、それゆえに実際の表現行為の諸相を的確に捉える記述が可能になるものと思われる。

注 6) 「客体尊称」（松下大三郎）、「受手尊敬」（渡辺実氏）、「客体上位」（辻村敏樹氏）などと、ほぼ同様の規定となる。ただし、この「間接尊重言材」と後述の「g. 間接尊重形式言材」とを「言材レベル」において区別して考える点が、従来の分類とは異なる。

注 7) 「恩恵」の性質を重視して、「恩恵」系を特立する考え方は辻村敏樹氏の分類(「敬語分類の問題点をめぐって」『国文学研究』94、1988)にも見出せる。ただし、後述するように「言材レベル」において、「くださる」「いただく」と「お・ご〜くださる」「お・ご〜いただく」とを区別し、また「お・ご〜くださる」と「お・ご〜いただく」を同類とする点などは異なっている。

注 8) 「キノウ」に対する「サクジツ(昨日)」、「チョット」に対する「ショウショウ(少々)」などは「狭義敬語言材」とは考えない。「サクジツ」「ショウショウ」などは、漢語一般が持つ「かたさ」が「改まり」の場で使用される「丁重言材」の「かたい」という敬語の特徴と釣り合うため、文体の統一性を増すのに利用されるだけのものだからである。これらの「言材」の中には、第一義的に待遇語として機能する性質は備えられていないと見るべきであろう。事実「きのうは・・・ちよつと・・・いたしました」という文は「イタス」という「丁重言材」の選択によって丁重文として機能していると感じられるが、「昨日は・・・少々・・・しました」だけでは丁重文として機能しているかどうかは判断しがたい。ただし、このような特定の語彙群の持つ硬軟の語感とは、「広義敬語言材」の性質を考える上では、考慮に入れるべきものとなろう。

なお、丁重語の性質について詳しくは、坂本恵「現代丁重語の性質―「致す」を中心にして―」(『国語学研究と資料』7、1983)・「丁重語と丁重文」(『辻村敏樹教授古希記念 日本語史の諸問題』、1992)、川口義一「議会における丁重語―謙讓語から尊敬語へ―」(『日本語史の諸問題』、1992)などを参照。

注 9) 従来の分類では、例えば「おっしやる」と「お・ご〜になる」とを同類とすることが多かったが、これらは「言材レベル」では基本的な性質が異なるものと考ええる。

注 10) 「お・ご〜する」については、蒲谷宏「「お・ご〜する」に関する一考察」(『日本語史の諸問題』、1992)を参照。

注 11) これらの「狭義敬語言材」は、「相手」「自分」が言材自体の性質に含まれているという点で汎用性が低くなるため、表現上の制約を持つことになり、その意味で特定の「文話」(「手紙」や「文書」など)に用いられることが多くなるのだといえよう。

注 12) 大石初太郎氏の提唱する「親愛語」(「お手紙」の例で言えば、童謡の「黒やぎさんからお手紙書いた」におけるような用法)は、「美化語」の特定の場面での現れ方と解釈し、一項目を立てるような分類にはしない。

(表1) 「狭義敬語言材」の分類

A 概念+敬語的概念

A 1 「尊重言材」

- 1 直接尊重 動作・状態の主体が高い(オッシャル、イラッシャル)
- 2 間接尊重 動作に関係する人物が高い(モウシアゲル、ウカガウ)
- 3 恩恵尊重
- 3・1 恩恵直接尊重 動作主体が高い+恩恵の授受(クダサル)
- 3・2 恩恵間接尊重 動作に関係する人物が高い+恩恵の授受(イタダク、サシアゲル)

A 2 「丁重言材」 動作主体を高めない+かたい・改まっている(イタス、ゴザル、マイル、モウス)

B 敬語的概念のみ

B 1 「尊重形式言材」

- 1 直接尊重形式 「～」の動作・状態の主体を高くする(オ・ゴ～ニナル、オ・ゴ～ナサル)
- 2 間接尊重形式 「～」の動作に関係する人物を高くする(オ・ゴ～スル、オ・ゴ～モウシアゲル)
- 3 恩恵直接尊重形式 「～」の動作主体を高くする+恩恵の授受(オ・ゴ～クダサル、オ・ゴ～イタダク)

B 2 「尊重形式丁重言材」 「～」の動作に関係する人物を高くする+かたい・改まっている(オ・ゴ～イタス)

B 3 「接頭・接尾言材」

- 1 直接尊重接頭 「～」の人物を高くする(レイ(令)～)
- 2 直接尊重接尾 「～」の動作主体・人物を高くする(～レル、～サマ)
- 3 尊卑接頭
 - 相手尊重接頭 「～」に関わる相手を高くする(キ(貴)～・ギョク(玉)～)
 - 自己卑下接頭 「～」に関わる自分を低くする(グ(愚)～・ヘイ(弊)～)
- 4 美化接頭 「～」をきれいにする(オ～)・「～」をりっぱにする(ゴ～)

C 敬語的概念のみ(ただし、「文話」に関わる)

「文体言材」

- 1 丁寧文体 文話を丁寧にする(デス、マス)
- 2 丁重文体 文話を丁重にする(デアリマス、デゴザイマス)

(表2) 狭義敬語の分類

I 概念+敬語的概念

I-1 「尊重語」

- 1 直接尊重語 動作・状態・所有の主体が高い（いらっしゃる、おかきになる、れいふじん、かかれる）
- 2 間接尊重語 動作・動作の結果に関係する人物が高い（もうしあげる、おききする）

3 恩恵尊重語

- 3-1 恩恵直接尊重語 動作主体が高い+自分（側の人物）に恩恵を与える（くださる、かいてくださる、おかきくださる）
- 3-2 恩恵間接尊重語 動作に関係する人物が高い+自分（側の人物）が恩恵を与える（さしあげる、かいてさしあげる）
動作に関係する人物が高い+自分（側の人物）が恩恵を受ける（いただく、かいていただく、おかきいただく）

I-2 「丁重語」 動作主体を高めない+かたい・改まっている（いたすおる、ござる、まいる、もうす、かいておる）

I-3 「尊重丁重語」 動作に関係する人物が高い+かたい・改まっている（おききいたす）

I-4 「尊卑語」

- 1 相手尊重語 相手が高い（おんしゃ（御社）、きこう（貴校）、ぎょっこう（玉稿））
- 2 自己卑下語 自分が低い（へいしゃ（弊社）、しょうせい（小生）ぐそく（愚息））

I-5 「美化語」 きれい・りっぱ（おこめ、ごほうび）

II 敬語的概念のみ

「文体語」

- 1 丁寧文体語 「文話」を丁寧にする（です、ます）
- 2 丁重文体語 「文話」を丁重にする（であります、でございます）